

13. 血小板シンチグラフィで局所 DIC を診断し得た一例

中西 悅子 井坂 吉成 恵谷 秀紀
 永野 恵子 大江 洋介 今泉 昌利
 原田 稔 (国立大阪病院・総合内、放)

大動脈人工血管置換後、感染症を契機に慢性 DIC を呈し、血小板シンチグラフィが診断に有用であった1例を報告する。

症例：82歳、男性。主訴：発熱、食欲低下、両下肢脱力、呼吸困難感。既往歴：心室中隔欠損症、高血圧。平成8年、腹部大動脈瘤に人工血管置換術(Y Graft)施行。現病歴：平成10年2月初め頃より感冒様症状をきっかけに徐々に食欲低下。3月3日両下肢の脱力を家族が気づき、3月4日当科へ入院した。入院時検査結果：CPK, FDP上昇、血小板低下を認めウイルス性感染をきっかけに筋炎、DICをおこしているものと思われた。入院後経過：ヘパリン7,500Uとミラクリッド10万単位、および抗生剤投与により、症状、検査データともに改善し退院となった。退院後全身状態は良好であったが、FDPが依然として高値のためヘパリン、ミラクリッドの点滴を再開し毎日行った。FDP値上昇が持続する原因として1.人工血管、2.他の部位の動脈瘤、3.悪性腫瘍が疑われ検索をしたが、他の部位の動脈瘤と悪性腫瘍は否定的であった。人工血管周囲で血小板消費性凝固障害をきたしているのではないかと考え、その確定診断のために血小板シンチグラフィを施行したところ、Yグラフトの人工血管に強い血小板集積が瀰漫性に認められ、48時間後、72時間後にはそれが増強していた。同時に血小板寿命も測定すると6.4日と若干短縮していることが確認された。これらの結果から慢性的なFDP値上昇は人工血管置換後、今回の感染を契機にして人工血管内腔での血小板消費と凝固亢進をきたし、局所的なDICを起こしていたものと考えられた。

14. 近畿地方における *in vivo* 検査の現状 ——第4回全国核医学診療実態調査から——

中島 智能 萩原 一男
 (社)日本アイソトープ協会・医薬品部)

アイソトープ協会医学薬学部会では、活動の一環

としてわが国における核医学診療の実態と推移を把握するため、1982年以来、5年毎に全国核医学診療実態調査を実施している。

調査は、核医学検査を実施しているすべての事業所を対象とし、平成9年6月1日～30日の1か月間に実施されたすべての核医学診療の種類、検査件数、放射性医薬品名、投与件数、投与量等について行われた。回収率は、施設数で96.3%、使用金額で98.3%であった。その調査結果について、概要と近畿地方における検査の現状について報告する。

昨年1年間に実施されたわが国におけるインビボ検査は、検査件数：186万件、投与件数：163万件であり、そのうち1/3についてSPECTが実施されていた。検査分類別にみた検査頻度は、骨・関節および心臓・血管の検査がそれぞれ全体の約27%、脳・脳脊髄液約14%、腫瘍および炎症の検査が約13%となっており、上位4項目で全体の80%を占めていた。

近畿地方におけるインビボ検査は、大阪13.2、兵庫7.3、京都6.5、滋賀2.1、和歌山1.5、奈良1.3万件行われていた。一方、人口10万人対検査件数では、全体の1,470件に対し、京都2,470、滋賀1,620、大阪1,500、和歌山1,350、兵庫1,340、奈良1,200件であった。また、全体に比較した分類別検査頻度は、滋賀は心臓の頻度が高く肺が低い、京都は骨の頻度が低く腎がやや高い、大阪は腫瘍と肺の頻度が高く甲状腺が低い、兵庫は脳の頻度が低く腫瘍および甲状腺が高い、奈良は心臓の頻度が低く腎・尿路および肺が高い、和歌山は骨および脳の頻度が低く甲状腺の頻度が高くなっていた。

15. FDG-PET を施行した慢性扁桃腺炎の2例

河邊 譲治 小山 孝一 岡村 光英
 赤土みゆき 阪本 浩一 松田 美貴
 越智 宏暢 (大阪市大・核、放、耳鼻)

頭頸部のFDG-PET画像上、左右の口蓋扁桃部に明らかなFDGの高集積を認めることがあるが、その原因は明らかでない。扁桃摘出術を施行した慢性扁桃腺炎の2例について、FDGの集積動態と病理組織学的所見を比較検討した。症例1は37歳女性。主訴は咽頭痛、嚥下困難。現病歴は幼少時より年に数回扁桃炎を繰り返し、切開排膿、抗生剤の投与などを受